

## Special Essay

### 生かされる知識とは

看護学科

野村 志保子

それまであまり足を運んでいなかった図書館で、論文として残さなければ何も継承されないという衝撃を受けたのは、1987年の集団赤痢の経験でした。

伝染病予防法のもと、まだ擬似・真性赤痢患者の全員が隔離収容されていた2月26日、某保育園より真性赤痢の診断で、園児1名が入院となりました。保育園を中心として家族内感染し159名の集団発生となりました。159名中137名が市から委託を受けていた当院隔離病棟での入院を余儀なくされ、総面積1230m<sup>2</sup>、ベッド数48床の2階建て病棟で、最高収容率は256.3% (123/48名) になりました。幼児の危険防止を理由に常設のベッドが撤去され、畳敷きの病室で点滴などの処置が施され、トイレには毎日便培養のために数十個の便器が並び、直径1m以上の大きなポリバケツに山盛り3杯以上の洗濯物が廊下に溢れ、消毒用ベースンのタオルは1時間もたたないうちに真っ黒になりました。衛生用品や感染防護具が進化した現代では想像もできないと思いますが、当時としては行政も医療スタッフも最善を尽くした結果でした。看護職員は常勤看護師12名、看護助手1名に12名が臨時に増員され、毎日夜遅くまで感染防止の方法や必要物品等の補充、役割担当等の話し合いが続きしました。悲惨な入院生活に対する集団の不満の訴えは凄まじく、医療が法の前でいかに無力であるのか痛感しました。当時はネットワークも検索ソフトも少なく、何か参考にできることはないのかとすがるような思いで、図書館で感染症の集団発生例の文献を検索しました。臨床家・研究者による病理学的影響や疫学的・公衆衛生学的知見はたくさん報告されていましたが、具体的な収容方法、サーベイランスによる看護ケアの工夫、隔離された入院による心理的影響等の実証研究的手法での報告は無く憤りを感じました。あれから22年、1995年1月17日の[阪神・淡路大震災](#)や同年3月20日の無差別大量殺人事件の[地下鉄サリン事件](#)以後、集団でのこうした事象においても何が起こってどう対応したのか、徐々に必要な生活ケアの工夫や心のケアの必要性などが医療者側の立場で報告されるようになってきたように思います。閑静な図書館ですが、そこには日々の医療の手助けとなる資料や課題が溢れています。医療の現場で躓いた時に指標になるのは、やはり図書であり文献です。図書館はそうした意味では知識の宝石箱ですが、今後も現場や専門家の方々の貴重な体験を、優れた感性と科学的根拠に基づき、是非論文にして頂き活かした知識となることを切望します。

